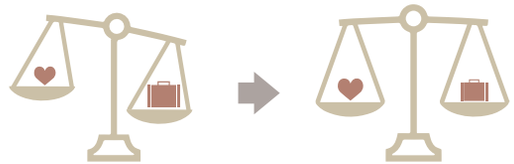
地方の魅力を活かした働き方のできる新しいワークプレイスの提案

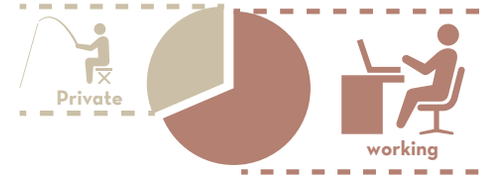
千葉大学工学部デザイン学科
コンテクスチュアルデザイン研究室
2015年度卒業研究
小副川玲奈

日本の働き方における課題

ワークライフバランス



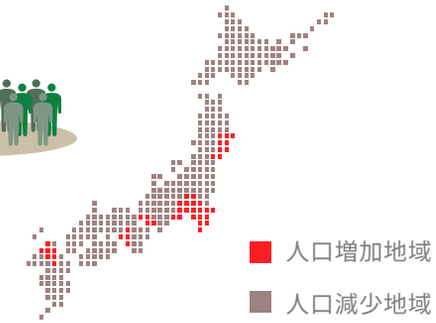
日本人は働きすぎている。毎朝、長時間満員電車に揺られ、同じ時間に出勤し、同じ場所でずっとパソコンに向かって働く。そのことが当たり前になっている。しかし働き方はもっと柔軟でいいのではないか。毎日同じ時間に出勤する必要はないし、たまには青空の下で働いたっていい。仕事は人生の大半の時間を占める。だからこそ、仕事のやり方を考えること、私生活とのバランスを考えることは非常に重要だ。



身体を動かす機会が少ない

都内で働く人は、一日中ずっと同じ姿勢でデスクの前に座り、パソコンのディスプレイを見続ける生活を続けている人が多い。オフィスの中だけで活動が完結してしまい、十分に身体を動かせられていない状況となっている。

地方創生



現在日本では都市に人が集まり、地方で過疎化が起きている。政府は地方創生を掲げ、地方へ人の流れを生もうと様々な政策を試みている。地方で過疎化が起きている大きな原因の一つに、地方には仕事がないことが挙げられる。しかし、インターネットが普及した今、どこでも仕事ができるようになった。それでもなお人が都内に集中するのは都会には地方にないものがあると思うからなのだろうか。しかし裏を返せば、地方には都会にはない魅力がある。それをアピールできれば、地方に人の流れを生じさせることができるのではないか。

研究目的　心身ともに健康でいられる働き方ができる地方における働く場を考える

調査活動

地方創生事例調査（デスクトップリサーチ）

徳島県神山町

魅力ある働き方をメディアで発信したことが成功の鍵

岩手県紫波町

官民共同の現実的な財政計画で成功

千葉県鋸南町

千葉県における遊休施設活用事例として参考

予備調査

都内に勤務する人のワークライフバランスの意識調査と現状の働き方を知る、移住・田舎暮らしについての基本的理解を目的とする予備調査をおこなった。

2015年9月　都内に勤務して働く50代男性3名へのインタビュー

2015年10月　都内からいすみ市へ移住して働く1名へのインタビュー

→ **テーマを地域資源を活かした働き方・働く場を考えることに決定**

本調査

上記のテーマをもとに、地域資源である農業について知ることや本研究で対象とする施設調査を目的に本調査をおこなった。

2015年12月13日　千葉県いすみ市　「いすみライフマーケットin ちまち」に参加

2015年12月20日　千葉県大多喜町「あつまんべ市」に参加　　地元農家5名と地元住民1名の方へのインタビュー調査

2015年12月13日　千葉県いすみ市の遊休施設「千町保育所跡地」の施設調査

2015年12月13日　千葉県いすみ市の古民家利用施設「星空の家と小さな図書館」 見学と運営者へのインタビュー調査

2015年12月24日　東京のシェアオフィス「Co-lab 渋谷アトリエ」 見学・インタビュー調査

いすみライフマーケット

あつまんべ市にて

Co-lab渋谷アトリエ

星空の家と小さな図書館

元千町保育所

結果・考察

地元農家

小規模農家は身体に良い野菜をこだわりをもってつくっているが、自分達が食べる以外の余った分をどうするか困っている。
小規模農家のつくるスーパー等には並べられていないこだわりをもった野菜を売る場所があると良い。

移住者

田舎の良い所はやはり自然を感じられること。
地域の良さを一番知ることができるのは、地元住民よりも実は移住者である。そのため移住でなくても、たまに都内から若い人がきて、地域の活動をおこなうのは良いことである。
移住だけでなく、都内に勤めている人がたまに訪れることもできる施設があると良い。

古民家・遊休施設

古民家のオフィス利用は財政面等により現実的にかなり厳しい。元千町保育所は自然豊かな田園に囲まれた位置にあり、建物も十分利用可能であるが、月1,2回のちまちマーケット以外では利用されていない現状がある。ここを対象に制作をする。

シェアオフィス

ブースの面積や、シェアオフィスに必要もしくはあると便利な機能(シャワー室・共有スペース)、プライバシーの管理など現実的な問題についての理解を得た。

ワークライフバランスを実現する
田舎の魅力を活かした働き方の考察

自然と連関する活動

田舎の最大の魅力は自然豊かなことであり、その中で身体を動かす活動をおこなう。例えば農業。地方には広い土地があり、昔からの農家も多くいる。都会と比べて農業を教えてもらいながらはじめることのできる環境がある。
サーフィンなどといったスポーツも、地方の魅力を活かした活動だ。いすみ市の隣町の上総一ノ宮市には、都内からはるばる訪れる人も多い。そこに近いことを活かして、朝サーフィンをしてから出勤するといった働き方も可能である。

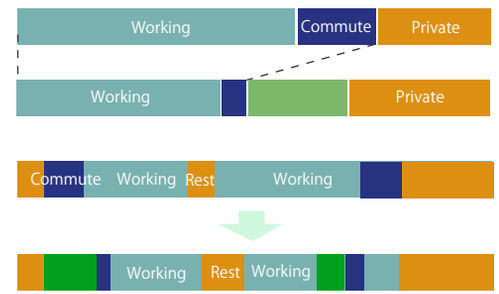
地元と交流する活動

地域活動に都内からの移住者が関わることも、また仕事のやりがいの部分につながっていく。自分の持つ技術を地方に広め、地域づくりに関わっていくことは直接誰かのためになっているという充実感を感じることにつながる。例えば都内で得たスキルなどを地元住民に広める活動をしたり、地域活動に住民と違った視点から参加することは地域のためにもなる。

仕事時間を柔軟に

労働時間が長いことがワークライフバランスのとれていない原因であるため、まず仕事時間を減らすことが挙げられる。また、都内で働くことに比べ地方で働けば地価が安い分、職住近隣が可能となり通勤時間も大幅に減らすことができる。そこであいた時間で上記のような活動をおこなう。

朝8時に出社して17時に退勤するといった、決まった時間で仕事をする必要はない。
朝は趣味のスポーツをして午後から出勤したり、仕事の合間に稲刈りをするといったことも可能だ。時間にとらわれない働き方ができる働く場所となる。



収入を主目的としない活動によりやりがいといった新しい価値の創出や、身体を動かしリラックスできる趣味を仕事と両立することで、心身ともにバランスをとれて働くことができる。

空間提案

地方の魅力を活かした働き方のできる
新しいワークプレイス「ちまらぼ」の提案

ちまラボ

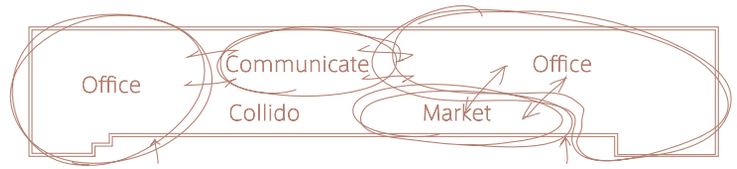
ちまラボにおける二つの空間コンセプト

都会資源と地方資源が混じり合い、新たなライフスタイルができあがる働く場

都会資源とは都内に務めている人が習得した技術や知識のことである。地方資源はその土地にある自然の豊かさや地域性といったものだ。この二つが混じることで、互いに足りないものを補完しあう関係ができあがる。例えば都内からきたワーカーは地元農家に教えてもらいながら農業を始める。かわりにワーカーが広告のスキルがあれば、農家の野菜をPRする手伝いをするといったような関係性だ。そこで、この空間は「地元住民」「地元農家」「都内から来たワーカー」の三者が入れ混じる動線をつくった。

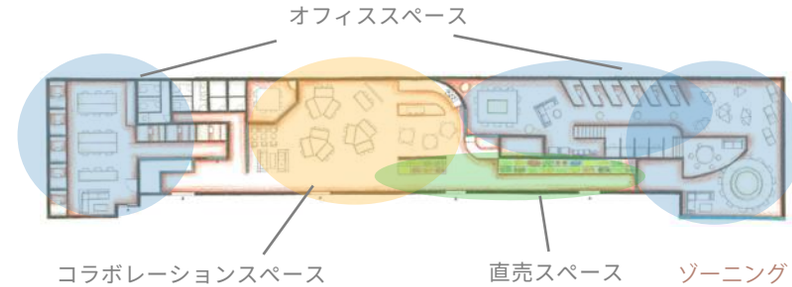
対象敷地

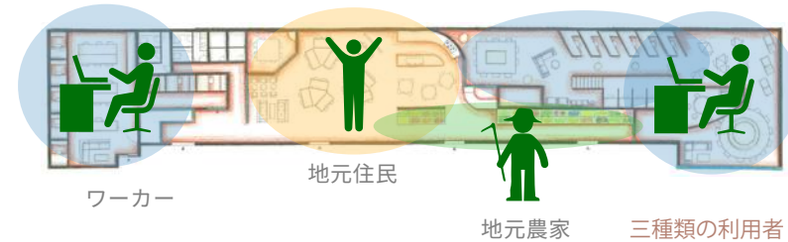
千葉県　いすみ市
千町保育所跡地



両側にオフィスをおくことでオフィスを行き来する間に他の利用者と出会う

空間のしきりをガラスの壁や、倉庫とすることで間接的にオフィス内がのぞけたり、交流が生まれ、人同士が混ざり合う空間に。





豊かな自然に囲まれていること

地方の最大の魅力は、豊かな自然に囲まれていることだ。働いている時、窓の外に緑が広がっている様子が見えたり、天気の良い日には河原や木の下で仕事をすることもできるだろう。自然の豊かさを最大限に感じることのできる働く場を考える。

田畑に囲まれた立地

窓の外に緑が広がる

オフィスから外へ出る

農業をする

河原で働く

カウンターゾーン

サーフボードのしまえるロッカー

窓の外に緑が広がる

ブースゾーン

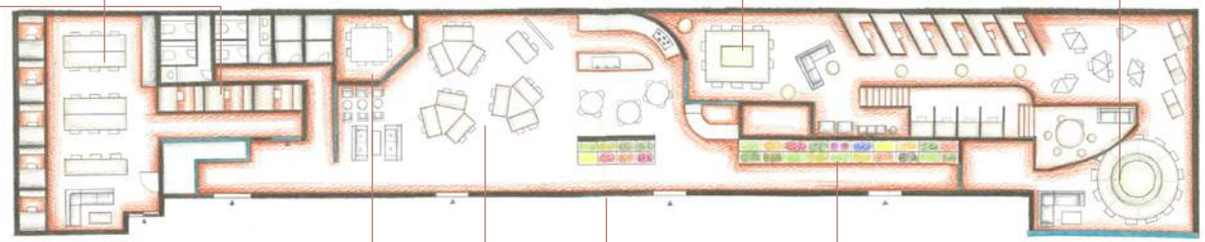
西側オフィススペース

個別ブースや、カウンターメインの静かに作業できるスペース

東側オフィススペース

テラスから気軽に外に出ることができたり、ロフト、Skypeミーティングがついているなど、コミュニケーション重視・アクティブに働ける

オフィススペース



ミーティングスペース

コラボレーションスペース

イベントの開催、昼食スペースとして使われる都内から来たワーカーが自分の技術や知識を地元住民に広めるようなワークショップをおこなったり、昼食時には直売スペースの野菜を購入して、キッチンで調理することも可能。

直売スペース

地元農家がこだわりを持って作る野菜を売っている、直売所の機能を持つスペース。外から色とりどりの見える野菜が、ディスプレイとなる。

ワークショップの風景

BBQもできるテラス

外から色とりどりの野菜が見える

利用者と1日の流れ

ちまラボで働く人を想定したペルソナを設定した。そして彼らがちまラボを利用するとしたら、どのような使い方をするか、1日の流れを想定した。5人のペルソナを設定し、そのうち二人を右に示した。

仕事の合間に農業をする人

サーフィンしてから働く人

子育てしながら働く人

仕事の合間に趣味のスポーツをする人

仕事の合間に地域活動をする人

都内から移住してきた A さん (55)

もともと都内の企業に勤めていたが、子供が就職し自立したことをきっかけに移住を決意。以前からしてみたかった田舎暮らしと農業を、仕事をかけもちながらおこなう。定年後は農業だけをゆっくりと続けていきたいと考えている。

農業　1 h 40 min
仕事　7h 30 min

畑で収穫した野菜をちまラボにて洗う。自分たちが食べる分意外は直売スペースで売り、昼食時には調理する。

服を着替え、シャワーを浴びる。その途中で他のワーカーたちに挨拶。

朝の 2 時間は西側のオフィススペースで集中し午後は気分を切り替え東側で。

朝収穫した野菜を昼食時に、ちまラボのキッチンで調理、仕事仲間とともに食べる。

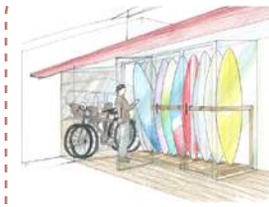
起床	畑へ	農業	ちまラボへ	シャワー	仕事	昼食	仕事	帰宅
6:00	7:00	7:20	9:00	9:20	10:00	12:30	13:30	rest (30min)	19:00	19:30

週に三日だけ都内から働きに来る B さん (30)

都内でフリーランスのライターとして働いているが、週末の3,4日間は趣味のサーフィンをするためにちまラボで働く。

サーフィン　2h 30min
仕事　6h 30min

始発に乗って、上総一ノ宮へ。朝一番の波に乗る。



ちまラボに着いたら、ロッカーにサーフボードをしまい、シャワーを浴びる。

他のワーカーとともに朝食をとる。

朝はコラボレーションエリアの共有スペースでメールチェックなどをおこない、午後は集中するため西側のスペースへ。

起床	上総一ノ宮へ	サーフィン	ちまラボへ	シャワー	仕事	昼食	仕事	夕食	帰宅
4:30	5:00	7:00	9:30	10:00	10:30	12:00	13:00	18:00	19:00

まとめ

以上のように、本研究で提案した空間において、

- 自然に囲まれた環境を活かして、心身ともにやりがい・メリハリを持って働くことのできる空間をつくった。

- 移住者や都会から働きに来る人の知恵と地域在住の人の知恵を交換することで、都内からやってきた人が地域に貢献できるとともに、その地方になじみやすくなる空間をつくりあげた。

- 地方の魅力を活かした働く場を、これからの日本の新しい魅力的な働き方の提案として、地域の可能性や有効性を提案した。

謝辞

本レポートは，小副川玲奈が実施した2015年度千葉大学工学部デザイン学科における卒業研究「地方の魅力を活かした働き方のできる新しいワークプレイスの提案」（所属研究室：コンテクスチュアルデザイン研究室，指導教員：樋口孝之）を抜粋し編集したものです。

本研究は，いすみライフスタイル研究所のみなさまをはじめとしたいすみ市在住の方々にご協力いただいて一年間の研究成果としてまとめることができました。インタビューにご協力いただいた地元農家の方々、「星空の家と小さな図書館」運営者の三星様、江崎様をはじめとしたいすみライフスタイル研究所のみなさまに心より感謝申し上げます。